



六
花

9

2021

りっかはいくかい

千

息つめてゐるが楽しや箱眼鏡
午後からは背山へ帰る蟬の風
三輪におとらず播州の冷さうめん
短夜の溺るる如く目覚めをり
退屈な宗祇の句集もどり梅雨
夜の秋真似できさうで出来ない句
破天龍庭に潜むか鉦叩
風の盆止めたる肘の眩しかり
虫の闇加藤魏山の手が止まる

仏師

夏草を雀り喰して山の牛
盆百合の香りを聞きににじり寄る
元親の血が湧きゐたる送盆

長宗我部

水音の中に胡瓜を揉んでをり
銀漢や余白をあそびとはいはず
こほろぎや末法の世に転げでて
夜の秋はふりの煙渦巻いて
八月は十七日の二重虻
阿波踊やさしいやうでむつかしき
耳遠くなりたる猫こちや夜の秋

写生子の消えたる虹を描ききり 笹村 政子

子どもにはあきらかに虹が見えている。それを真剣に画いているのだらう。決して嘘を画いているのではない。「もう虹は消えたじゃあないの」と、もし教師がいうようなら失格。子どもには七色の、もしくはそれ以上のあぎやかな虹が見えている。これは事実上の真と文芸上の真の違いである。たとえば正岡子規が「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」と詠んだが、事実(作った)のは東大寺であったが文芸上は法隆寺の方が佳いと判断して変えたのと同じ。見えぬものを見るように描くのも創作。それを理解できない人は句会に来て質問をどうぞ。(六八)

しゃせいしのきえたるにじをえがきおり

大夕焼斬られ上手ながき大将 永田 万年青

「一芸は多芸に通ず」である。餓鬼大将は何か魅力のある男で、皆を統率できる特技があり、喧嘩も強い。こういう男はどこか芝居がかったことが好き。例えば亡くなった「斧」の吉本伊知朗主宰は村芝居一の役者だったし、「刃傷松の廊下」を歌わせたら天下一品。古武士のようで皆に人気があった。(六八)

おおゆやけきられじょうずながきだいししょう

消えたる虹 ◎ 笹村 政子

夫に添ふ水の安曇野虹立てり
夕虹のかかりし旅の淡海かな
写生子の消えたる虹を描きをり
花菖蒲影の静もる水面かな
菖蒲園江戸伊勢肥後を一巡す
大甕に睡蓮咲けり源氏寺
波音の子守唄なり月見草
おとうとの女ことばやはつたい粉
晩年の父深ぶかと籐寝椅子
天上の楽降らしめよ星まつり

▽政子の句

▽写生子とはだれかの指導で写生に来ているのだろう。先ほどまで出ていた美しい虹が消えた。しかし、この児童はそれを強く記憶していたのだろう。児童は目の前に消えてもうない虹を見ているかのように描いているのである。これは俳句にも通じることで、詩の真実を描くとはこういうことを言うのである。かつて西行が遊行柳を見ていなくても、鳥羽天皇の命により「清水流るる柳影……」と詠った。その柳をみようと芭蕉はおくの細道に旅で遊行柳の前に立つて「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」と詠んだ。芭蕉も「ああ、これがかの柳か」と感銘して詠んだわけではない。ここでは西行が見ていなくても詠める風流心を京都にいてもありありと思ひ浮かべることの出来る西行の心（風流）に触れることができる。ことを目的のひとつともしているのだ。だから写生している子どもには画用紙にありありと虹が見えているのである。それを詠んだ。夢風撰。

▽菖蒲園に来て菖蒲の名前で、江戸・伊勢・肥後と、まるで諸国を遊覧したかのごとく軽みを持たして詠んだ。しかもその地名を上手く整理して江戸はもとより伊勢神宮や肥後熊本と名所を押さえてあるのも巧である。

▽麴粉（はったいこ）は、オオムギの玄穀を焙煎した上で挽いた粉で夏の食べ物。どうして夏場食べるのか「歳時記」には説明してなく、昭和の子供にはなつかしい食べ物というか虫抑えに食べたものであろう。麦粉は今は落雁として味わえるていどか。作者は漢字で表記したが、この字マイクロソフトのワードには無い漢字で「太郎A T O K にしか無いフオントなのでひらがなで「はったい粉」としてある。しかしやはり句としては「弟の女ことば」が最大の眼目で夢風撰候補。

▽星まつりの句は、亡くなったお嬢さんへの呼びかけ。織女がお嬢さんの星でそこから美しい音色を降り注いでおくれよ、と願うのである。ラフマニノフの前奏曲『鐘』であろうか。

山法師 ◎ 志方 章子

道草の途中四つ葉のクローバー
母の膝柔らかかなりし若葉風
盛りなる無人の家の紅つつじ
夏館アンドロイドの渋沢翁
うる覚えなるともあれは山法師
新茶汲む語らふ夫の居らずとも
女振り上がらぬカット新樹風
麗らかや夫買ひくれし服を着て
一人身を思ひ知るなり新樹晴
歌ひつつ手鞠つきみし子供の日

▽章子の句

▽母上の膝に乗っていた頃の句。その思い出は若葉の頃に繋がるのだろう。俳句的には若葉と軟らかさが付きすぎるのだが、それも思い出濃く印象に刻まれているのなら。それもいいだろう。柔らかいのは風と若葉に懸かっているのである。

▽山法師の花に見覚えがある。が、確かではなく水木の花にも思える。がいやあれは山法師にちがいないと記憶の中で反芻している。またそういう花である晩夏にはヤマボウシの実が熟して食べられるが、鳥取から兵庫へ向かう国道の峠にも見事な花が咲く。また「風の盆」の広大な駐車場で実を食べてみたことがあるが、あまり美味しいものではなかった。しかし、風の盆は優雅で素晴らしい雰囲気であったが、本当の風の盆は観光客が帰って深夜十二時を過ぎてからだと、なかにし礼さんが石川さゆりさんに言っていたという。「蚊帳の中から花を見る咲いてはかない酔芙蓉」という作詞家は天才だ。風の盆のある町中には一軒だけ酔芙蓉を鉢に咲かせていた店があった。それだけであの歌詞が出来るのもすごい。

▽新樹の句、髪をカットしても女ぶりが上がらないと嘆く。最近の女性は化粧法の進歩で、整形したくらいの効果がある。だが、化粧は化ける装いなので、化けの皮はやがて剥かれる。女性の美しさは内面からにじみ出てくるのだから、安心して。奈良の女性主宰はずっと素顔で通してそれで美しいのであるから、本当の美女。

▽新茶とくれば夫婦で、などという一定のパターンがあるが、章子は「語らふ夫」が居なくても、あつけらかんと言う。ご主人の呪縛から少しずつ解けてきたのか……。

花菩提樹



升田ヤス子

一木に喙へ鳴きして巢立ち鴟
てんとむし乙女の爪に留まれる
でで虫の逢瀬に沈む草むぐら
海芋咲き自噴の井戸の力かな
亜麻鷺の畦に 一列梅雨夕焼
花あふち何の憂ひかわからぬに
菩提樹に恋ひ焦がれみて花の虻
菩提樹の花の時雨を享けにけり
菩提樹の花の香こもる髪を解く
姫沙羅の鉦の一打にほぐれけり

▽ヤス子の作品

▽ヤス子の佳いところは今までの使い古した言葉を排除しようとする努力をるところだ。が、巢立ち鴟とは珍しい。ヤス子のおかげで百舌鳥が渡り鳥ではないと知った。その他にもいろいろと珍しいことを教えてくれる。だから吟行に出掛けても安心である。しかしこれから俳句を本格的に勉強しようと思う人は内容の独自性と特殊性とのちがいを学ばなくてはいけない。これについては折々述べていきたいと思う。

さて、ヤス子のいう鴟の巢立ちはたしかに珍しいがこの句のヤス子の手柄は「喙へ鳴き」である。夢風撰候補。

▽でで虫の句も佳い。「逢瀬に沈む」も写生をもとに「逢瀬に沈む」草とした工夫がある。

▽鶴林寺に吟行したのだろう。菩提樹が咲いている（菩提樹の花が季語）下に居て、帰宅して髪を洗ったら、尊い香りがしたというのだ。おそらく鶴林寺で菩提樹の花を仰いでいたのだろう。その時の香りが髪に移っていたのだ。移り香のよろしさは香を焚きしめるなど源氏物語など古典文学にもでてくる。さて今回は菩提樹で三句を発表した。三句を出そうと思えば三十句は詠んでは捨てているのだろう。そのくらい作れるようになれば俳人の努力は出来ているのである。

▽てんとう虫は乙女の爪にまるでマニキュアのようにとどまっている。このようなマニキュアをしてもいいなあと思えているのであろう。

蟻地獄 ◎ 藤生不二男

松蟬の声のかなたに遠嶺あり
浮き苗に高野聖のかくれけり
山風のやはらぎ来たる椎若葉
水盤に余白のありて花菖蒲
老鶯のこゑに高さのありにけり
それよりの遠きまなざし籐寝椅子
絶妙の間合ありけり蟻地獄
午後の日の傾きはじめし立葵
原つばに風のもどりし合歡の花
分かち合ふ銀の短冊星まつり

▽不二男の句

▽松蟬の句、ただ松ゼミが鳴いていた事実をいったのか、ただの蟬では物足りなかったのか知らないが、松ゼミは春ゼミのこと。遠くに見える峰々にはまだ残雪があるのかもしれない。近くに鳴く蟬と遠くに見える峰の遠近法対比だろう。たとえば「おくのほそ道」、山寺（立石寺）で詠んだ芭蕉は旧暦七月の晩夏であるが、何々ゼミとは言わずただ、「蟬」とだけ詠んでいる。筆者も蟬の声の聞き分けができないから春ゼミの声を聞き分けられないが、遠方に見える峰々には雪も残っているに違いないと思うのである。

▽花菖蒲を水盤に生けてみるとかなり余白があるなあと発見。東洋、とりわけ日本の美は余白にありとする。俳句も言葉の余白を大切にす。例えば金魚の絵を色紙に描くとき、山下清画伯のようにびっしりと埋め込む画法でなく、金魚の縁取りをして赤色を金魚の一部に少し塗るだけで人は金魚であると思う。（この技法は以前書いた。金魚は赤いと既成概念があるからそう思い込むのである。（これは以前にも書いた）。

▽籐寝椅子の句、籐寝椅子に安らいでいるときある思考が働いた。そのときから以降、頭の中に渦巻いて安らぐどころではない。それが人間というものだ。眼差しは遠くを見ているようで見ていなく、頭の中をぐるぐる見ているのだ。それを執着という。

▽立葵の句。立葵が天辺まで咲き登ると梅雨が明けると言われている。梅雨明けの太陽も既に傾き初めているのだが、陽が傾くと昼間の衰えなど知らぬ気に立ち直っているのである。葵の立ち姿も本格的な夏を実感させる。

あんよ ◎ 善野 行

黄菖蒲の水辺を過る乳母車

緑蔭にはみ出す嬰兒のあんよかな

こもれびの小径ここより姫女苑

青梅雨のしづかな街となりにつり

夜尿してしののめに聞くほととぎす

くたびれてもどるちちはは火取虫

鳩首して蛙の手術してをりぬ

藪越しの空晴ればれと鯉のぼり

鯉のぼりをとこばかりの三代目

六月の水の満ちみて杭一つ

▽行の作品。

▽「あんよ」幼児語で赤ん坊だとわかる。あかんぼの足が乳母車をはみ出したのであろう。母親も赤んぼも木陰に入つて憩っていたら、赤ん坊が伸びをしたのか窮屈で足が乳母車からはみ出した光景。嬰兒と書いて「やや」とよむ。赤ん坊が緑陰をはみ出したのかと思つたが、そうでなく乳母車からはみ出したのだらう。

▽しづかな街とは心象的にそう感七たのでらう。小説か詩の題名にでもよさそうな響き。青梅雨とは「梅雨」と用いる場合よりも、鬱陶しき、暗さがやわらぎ、しっとりとした感じや、明るい感じが強まる。その気持ちで見える街に作者は居る。山崎まさよしの歌に出て来そうな雰囲気。

▽夜尿とはおねしょのこと。掲句は子どもの頃の句を詠もうという句会の兼題で詠んだのであろう。夜明け方オネショによつて目を覚ました。夜明け前の時鳥の声が妙に強く聞こえ、親が目を覚ますのではないかと不安に襲われるのである。目が覚める直前によく夢をみた。尿意を催してあちこちトイレを探しながら、我慢しきれず放尿をするのだが、なかなか出なくて難儀をしていたときに目が覚めると蒲団がぐっしり濡れていた経験は何度かある。

▽くたびれて戻る父母も幼児体験の句か。父母が火取虫が飛び交う時刻になつて疲れて戻つてきた。火取虫とは夏明かりを求めて集まつて来て狂つたように揉み合う虫たちのこと。昔は外灯や家の明かりにいろいろな虫が集まつた。その中にはカブトムシやカナブン・蛾など子どもの欲しがる虫や毒虫も飛んで来る。が最近はLED光源が増えて虫が反応しなくなった。

▽子どもは実は残酷だ。そして嘘をよくつく。掲句は蛙を解剖しながら子どもたちが額をつきあわせて相談しているように鳩首という言葉を幹旋した。手術される蛙は病気を治すのでなくただ切り刻む残酷な場面なのである。

▽鯉のぼりの句、この家には女の子がどうも生まれにくいようだ。男の子が欲しくてたまらない家もあれば逆の場合もある。昔は男の子には嫁がつくから、女の子でなくても良いという傾向があつた。

吊り橋 ◎ 住田千代子

野茨や分け行く先は滑り台
老鶯や吊橋の揺れ今佳境
老鶯やもう引き返す丸木橋
寄り道の鬨竜灘に鮎跳ねる
心地よき風を見下ろす鮎の川
稜線をはるかに里の鯉のぼり
節くれの手に蚕豆の膨らかよ
蚕豆の十粒で足る子の算数
鳥声の今騒がしき桜の実
美しき毒の匂ひを梅雨茸

▽千代子の句。

▽吊り橋を渡っていると老鶯（夏鶯）が盛んに鳴いている。ふと耳を鶯に傾けたら、バランスが狂って吊り橋がグラグラと大揺れしている。老鶯の盛んなさまと吊り橋の揺れが連動してグラグラ揺れ出したのだろう。それを鳴き声と揺れの「佳境」であると表現した。一方でその揺れを恐（こわ）楽しんでる作者がいる。以前心理学者の河合隼雄氏が「苦楽しい」という表現をしたことがあるがこの場合は「恐楽しい」とでもいうか。

▽鬨竜灘というのは兵庫県加東市にある激流の個所で奇岩・怪岩が加古川の川底いっぱい起伏に連続し、岩に阻まれた川の流れは激流や滝を形成している。飛び鮎の名所。そこには碧梧桐の句碑もあるが今鮎の最盛期である。鮎料理の店もあるが高い。以前台風が来て水かさ上がり、怖いくらいだったが延川夫妻が行こうというので連れて行ってもらった。名前の通り激流でまさに龍が怒っているような光景で淵に潜んでいた龍が飛びだして来たような景色であった。ちなみに「播州寝覚の句碑」は「跳びあへず渦巻く鮎のひねもすなる哉」と刻んである。大正5年（1916）5月28日に、播磨地方の俳友達が河東碧梧桐を鬨竜灘へ招いた際、加古川の清流のひとつときの旅情を詠んだ句を刻んだ碑。その七名の方の名前が分かればよいのだが。

▽老鶯が鳴く中怖さをこらえて丸木橋をなんとか渡っていたが、もういけないと途中で引き返したのだ。そのまま渡る方が今来た長さより短いのだが、引き返したと思われる。恐怖が先に立つともういけない。下を見ると激流なのだろう。恐怖に襲われると身体が強張る。間違つて滑り落ちそうな恐怖が勝つのである。蚕豆で渡りかけて落ちる人もある。昔、「雪の橋渡つて帰るつもりなし」でなくては男じゃあない、と言われたこともある。しかし千代子は引き返す勇氣がある人なのだ。

▽梅雨茸の句、「毒の匂ひ」とは毒の気配、色あい、色つやが毒々しいと見たのだろう。毒でもいいから食べたい人もいるにちがいない。